

第267回くらしの植物苑観察会 令和3年6月26日（土）

梅雨を彩る植物たち

辻 誠一郎（東京大学名誉教授）

梅雨という季節

日本の季節は、春、梅雨、夏、秋霖、秋、冬の六つに分けることができます。沖縄は少しづつ時期が早まります。北海道には梅雨という季節が確認できないと言われてきましたが、近年の環境変動を見ていると、台風だけでなく梅雨という季節が明確になってきたように思います。六つの季節は何を意味しているのでしょうか。それは、雨の少ない季節と雨の多い季節が交互にやってくるのです。六つの季節なので、三つのサイクルがあることがわかります。このように季節によって雨の降り方がかわることを降水の季節配分と呼んでいます。春夏秋冬の四季からなると古くから言われてきましたが、それは中国中南部の季節感が伝わってきたもので、降水の季節配分という日本の自然の特徴が重視されていなかったからなのです。

梅雨、秋霖、冬は雨（雪）が多い季節です。梅雨には梅雨前線、秋霖には秋雨前線が南西から北東へゆっくり移動し、ときには長く停滞して大量の雨を降らし、洪水や土砂災害をもたらします。日本列島にはこうした自然に適応したたくさんの特徴的な植物、植生が育まれてきました。

梅雨の始まり：卯の花・空木（ウツギ）

佐々木信綱の作詞した「夏は来ぬ」の歌詞「卯の花の匂う垣根に、時鳥早も来鳴きて、忍音もらす夏は来ぬ」は私も小学生のころ、そのすがすがしさのためかとても好きだった歌の一つです。卯の花の垣根は、しばしば屋敷の境界や畑の境界にぼつりぼつりと見かけることがあり、今も生き続けているのです。青森県の下北に出かけたおり、屋敷や畑の境界に、連綿とつながる生け垣を見たことがあります。この生け垣は境界を示すだけでなく、邪悪なものが進入してこないためのもの、つまり卯の花に邪気を追い払うパワーがあると考えられています。水田の水口に真っ白い花々の着いた小枝を何本も突き刺している光景を見たことがあります。稲に悪い虫が付かないように、水田に入ってこないように願ってきたのです。また、真っ白い花々はたわわに実った稲穂に見え、秋の実りを祈願しているようでもあります。

梅雨の真っ盛り：毒溜（ドクダミ）と半夏生（ハンゲショウ）

毒溜はどこでも見ることができるポピュラーな草本です。ドクダミを毒溜と書いたのは私なりの解釈によりますが、群生していることが多く、そばに寄るだけで強い香りを放っているからです。その香りを毒どくしく思っている人も多いでしょう。しかし毒溜はけっして嫌われ者であるわけではなく、民間薬として古くから利用されてきた重宝な草本なのです。軒下に吊るされている光景を目撃することもしばしばですが、これは毒溜茶を作るためのものです。梅雨のころの農家の作業でもありました。

半夏生は、農事暦に組み込まれた「半夏生ず」にかかわってきた草本で、花に近い2枚か3枚の葉が葉緑素を失って部分的に白くなることから半夏生と表現されたりしました今年の夏至は6月21日、それから11日後の7月2日、すなわち末候が半夏生です。この日までに田植えは終わっているべしと言われてきたのです。

半夏生と毒溜はいずれもドクダミ科に属していて、世界でも分布も特異です。日本を含む東アジアにはどちらも自生しています。半夏生の仲間は北米にも分布しています。これはドクダミ科がかつては北半球に広く分布していたのが、環境変動によって東アジアと北米に分布が引き裂かれ、遠い距離を隔てて辛うじて生き残っていることを物語っています。そのいずれもが梅雨と農事にかかわっていることは面白いことです。

芒種から大暑：アジサイの仲間

五月雨は旧暦の長雨のことをいい、現在の暦では六月から七月の梅雨にあたり、芒種から大暑の始まりのころまでです。今年の芒種は6月5日、大暑は7月22日ですから、梅雨後半に差し掛かったところでしょうか。この時期を特徴づける植物はアジサイの仲間です。

アジサイの仲間のことをアジサイ属と呼んでいます。かつてこのアジサイ属はユキノシタ科に含まれていましたが、現在ではアジサイ科として独立し、ミズキ科に近縁であることがわかってきました。アジサイ科にはアジサイ属のほかに、バйкаアマチャ属、イワガラミ属、シマユキカズラ属、バйкаウツギ属、そしてウツギ属が含まれます。アジサイ属にだけ稀に葉っぱが輪生になることがあります。他はすべて対生です。これは共通する大きな特徴です。葉っぱはすべて単葉です。花がとても面白いのです。バйкаウツギ属とウツギ属は装飾花がありませんが、その他にはふつつ装飾花があります。

アジサイの花の基本的な構造は、中央にあまり目立たない両性花が集合し、まわりを大きな「がく」と小さな花びらからなる装飾花が取り巻いています。江戸時代、シーボルトが愛したアジサイはガクアジサイを品種改良した手毬咲きで、ほぼすべてが装飾花になっています。現在ブームになっているのはガクアジサイの品種群で、近代から現代に作出されたものが大半です。鎌倉をはじめ各地のアジサイの名所が登場するのは最近のことなのです。

近世以前のアジサイの記録はさほど多くありません。古代では「集真藍（あづさあい）」などと呼ばれ、しばしば使われる「紫陽花」は誤用です。アジサイの仲間が多い中国では、「紫陽花」はムラサキハシドイの仲間を指しているのです。

.....

次回予告 第268回くらしの植物苑観察会 令和3年7月24日（土）

「中世人のくらしと植物」（当館考古研究系准教授 村木 二郎）

13:30～15:30（予定） 苑内休憩所集合 申込不要 定員20名